

歴史の中の女たち

＜第7回＞

マダム・リンチ

伊藤 滋子

パラグアイは外界から遠く隔てられた内陸にあり、海への出口は他国の間を通る1本の河だけという地勢は瓶に似ている。容易に外からの介入を許さず、スペイン人の統治が始まって間もなく、王室が派遣した司令官に手かせ足かせを付けて本国へ送り返すという荒業をやったのけ、また早くも17世紀、他国に先駆けて独立の兆しを見せたのもこの国であった。イエズス会が先住民の間に築いたグアラニ布教地は、ほぼ外界から隔離されたまま150年間続いた。1811年の独立後25年間鉄拳をもってこの国を治めた独裁者フランシアは鎖国政策をとり、虎視眈々とこの国の領土を狙うブラジルとアルゼンチンの干渉を注意深く退けてきた。パラグアイは資源もなく貧しい国だったが、フランシアが没した1840年頃、国民は比較的豊かな経済水準にあって平和を享受していたといえる。

次の大統領カルロス・ソラノ・ロペスも同じく独裁者ながら啓蒙君主でもあり、一転して開放政策をとり、産業を発展させて国力の増強に努めた。外国から指導者を招き、若者を留学させ、鉄道を敷き、南米最初の電報システム、商船、溶鉱炉を導入、また灌漑設備や農業技術を導入して農牧業を振興した。その結果、十数年にしてこの国は南米屈指の先進国となるまでに発展した。しかしこの政策

はイギリスと手を結ぶブラジル、アルゼンチンの介入を招く恐れがあり、決して良いことばかりではないことを十分心得ていた大統領は、両国に対抗するために軍事力の増強にも力を注いだ。このあたりの事情は富国強兵に邁進した明治時代の日本と似通っている。1853年から英米、ブラジルなどと相次いで通商条約を結んだが、これは日本が欧米諸国と通商条約(1854～58)を締結した時期に重なる。

大統領の長男フランシスコ・ソラノ・ロペスは、早くから軍人としての教育を受け、18才で大佐、20才の時にはアルゼンチンに派遣されたパラグアイ軍の総指揮官に、ついで陸軍海軍の総司令官となった。パラグアイ人の常として、スペイン語とグアラニ語を話し、英語、フランス語も流暢であった。後年大統領になってから彼自身が側近の助けなしに書いた外交文書は完璧で、演説は困難な状況にあった時でさえ聴衆を感動させたというから、非常に優れた能力を持っていたことは確かだ。しかし目をつけた女に恋人がいれば彼を殺し、思い通りにならない娘は監獄に送り、男たちは後難を恐れて美人の誉れ高い娘には近づこうとしないような有様で、まるで中世の暴君のような一面もあった。

彼は27才の時、父から全権を委任されてヨーロッパに行った。金にダイヤを散りばめ

たサーベルを腰に軍服姿でナポレオン3世と
 会見し、イギリスやフランスで軍艦や武器
 を買い付け、国交を結ぶためにヨーロッパの
 国々の元首を訪問して回るこの若者は、華の
 パリでもかなり人目をひく存在であった。こ
 の時かれが見そめたのがアイルランド生ま
 れのエリサ・リンチである。彼女は10才で
 父を亡くし、母が再婚したあとは孤児院で育
 てられた。そのような境遇の娘は住み込みの
 家庭教師になるのが普通だったが、彼女は15
 才で、兄から紹介された25才も年上のフラン
 ス人軍医カトリファージュと結婚する。そ
 してアルジェリアに行くが、ロペスに出会っ
 た19才の時には、夫と別れてパリで暮らし
 ていた。空のように青い目と透き通るような
 肌をもつエリサを知って以来、ロペスは彼女
 を宝石で飾り立てて、崇拜するナポレオン3
 世との会見にも、ヨーロッパ各地を訪れる時
 も、日曜ごとのノートルダム寺院でのミサに
 も連れ歩き、片時も離さなかった。やがて彼
 女は妊娠したが、ロペスは買い付けた軍艦に
 乗って帰国することとなる。エリサは比類な
 き富と大自然を有すると恋人が語り聞かせる
 新天地で彼と結婚することを夢見て、別の
 船で後を追った。そしてブエノス・アイレス
 で長男パンチートを出産し、1855年の末パラ
 グアイの首都アスンシオンに到着する。

だが、すぐさま彼女は結婚は幻想に過ぎないことを知った。そこは彼女のような女の結婚を許すような土地柄ではなく、相手が次期大統領ともなればなおのことである。まず、司教から赤ん坊の洗礼を拒否される嫌がらせを受け、恋人の家族からは冷ややかな目で見られ、上流社会の人々からは「あのフラン



ス女」と呼ばれて蔑まれた。またロペスには大勢の愛人や子供がいることもすぐに分かった。唯一彼女に同情をまじえた親しみを見せたのは女中など、下層の女たちだけである。

ヨーロッパでは片時も彼女を離そうとしなかったロペスも、父に対する遠慮から彼女を町の外に住まわせ、時折通ってくるだけとなった。二人は最後まで同じ屋根の下に暮らすことなく、エリサは生涯、旧姓で通し、マダム・リンチと呼ばれた。だが決してロペスの愛が冷めたわけではなく、エリサは毎年のように彼の子を生み、その寵愛を楯にかなり強引なやり方でパラグアイ社会に入りこんでいった。ロペスの誕生日を祝うために催された船上での昼食会の時、招待客が彼女をのけものにして立たせたまま、誰も席を譲ろうとしないのを見て、客の皿を全部取り上げ、料理を河に捨てさせてしまった。

しかしセンスの良い彼女がパリからとり寄せる香水、洋服地、雑誌、ぶどう酒やシャンパンなどはアスンシオンの人々の憧れの的となり、彼女のヨーロッパ風の洋服や食器、お菓子、ピアノ音楽、化粧法などはすぐに流行した。庭いじりやチェスなどの趣味、家に

プールを作ることなど、それまでパラグアイにはなかったことも盛んに行なわれるようになった。ミシンを持ち込んだのも彼女が最初だった。女性は馬に乗る時、横座りするのが普通だったが、彼女はそれを嫌い、跨って乗ることを普及させた。

1862 年、父の死によって 36 才のロペスが大統領に就くと、エリサは町の中心に大きな家を建てて移り住み、公然と社会に影響力を発揮し始めた。ナポレオンの御用画家に描かせたロペスの肖像画が掲げられ、フランス風の家具や装飾品でしつらえられたその家はまるで「フランス博物館」の様で、夜毎に開かれる宴会には洗練されたフランス料理が供され、大統領は尊敬するナポレオン 3 世の扮装で現れた。彼女のサロンには外交官や、芸術家、知識人が集い、寸劇が上演されたり、文学サークルでは新作が発表されたりして、新しい文化を発信する場となった。そこで踊られるダンスはすぐにパラグアイ中の若者の間に広がる。エリサはまた、パラグアイ最初の女性専門病院を創り、貧しい人々も医療を受けられるようにした。この様に彼女は短期間で 19 世紀のパラグアイ社会と文化に大きな影響を与えた。

しかしエリサの平和は長くは続かず、パラグアイは南米の歴史上最も悲惨なパラグアイ戦争(1864~70)へと傾いていく。不幸なことに、ロペスは、注意深く隣国との不干渉主義をつらぬいた父ほどの政治感覚を持ち合わせていなかった。隙があればこの国を併合しようと狙う二つの大国、ブラジルとアルゼンチンに挟まれてパラグアイが独立を保っていくには、老練な舵取りが必要だったが、

若くして政治と軍事の両権力を握り独裁者となったロペスにはそんなことは念頭になかった。却って、先の 2 人の大統領が営々と築いてきた隆盛を享受するばかりであった彼には、大国意識しかない。国内には自分より優秀なものはいないと考え、誰の忠告もうけつけず、取り巻きの甘言のみを信じるような彼の周囲には、外交の専門家も、率直な意見を進言できる側近もいなかった。この戦争は 16 世紀以来ブラジルが旧スペイン領の領土を奪い続けてきた長い歴史の延長線上にあったとはいえ、戦争の口火を切った責任はやはりロペスの側にある。

開戦当初はブラジルの準備不足から、先制攻撃をかけたパラグアイが優勢であったが、ロペスが犯した数々の失策の結果、開戦の翌年からパラグアイは、ブラジルと密約を結んだアルゼンチン、ウルグアイとも戦わねばならなくなった。ロペスはこの 2 国に停戦を申し込もうとしたが、密約の中に単独講和を禁じる条項があったため、失敗に終わる。この密約は、綿織物産業で世界第 2 位の競争相手として追従してくるパラグアイを叩き潰すことを狙ったイギリスが仕組んだものと、パラグアイでは信じられている。イギリスでこの密約が漏れて公になると、他のラテンアメリカ諸国はこぞって同盟 3 国を非難したものの、直接支援を送る国はなかった。それでも現実を見ようとしない夢想家のロペスは、国家の威厳を保つために戦争を続行し、国民は盲目的にそれに従った。彼らは何も知らされず、議会も裁判所も新聞も機能せず、政府の発表を信じるしかなかったからだ。

戦争が始まるとエリサは軍服を身につけ、

10 才のパンチートを連れて戦線に赴くロペスに付き従い、大佐と呼ばれて軍のシンボルとなった。1866 年には最前線で 7 番目の子供を生み、出産の直後にはもう負傷者の手当てに走り回っていた。しかしその赤ん坊は間もなくコレラで死ぬ。戦争とコレラが甚大な被害をもたらすなかで、さらに新たな敵が加わる。彼女は早くから独自の情報網を持っていて、ロペスの家族が謀反グループに加わったことを探りだした。エリサからそれを知らされた彼の報復は凄まじく、謀反者もろとも弟や義兄を処刑し、妹たちを監禁した。母親までがロペスに毒を盛ろうとしたが、数多い娘の一人が事前に報せ、危うく難を逃れた。またエリサは時々アスンシオンに帰り、貴金属や宝石の供出を呼びかけて、軍資金を集めた。このような彼女の行為に対する評価は、誇大妄想をロペスに吹き込んで彼を操り、戦争を深みに追いこんだというものから、彼女こそが軍の魂であり、心の支えであり、献身的な看護で多くの人を救った、と様々である。

勇猛果敢なパラグアイ軍はよく持ちこたえたが、ついに 1869 年、同盟軍が首都アスンシオンを占領し、反ロペスの臨時政府を擁立した。ロペスは生き残った兵を率いて逃げ、飢えに苛まれながら東北部を転々とし、なおもそれから 1 年以上持ちこたえた。残る兵はもう僅かで、老人、子供、赤ん坊を背負った女までが、戦列に加わった。中でも悲惨だったのは終戦から半年前、アコスタ・ニュー村で起った戦いである。2 万のブラジル軍の進撃を食い止めた後方部隊は教会の前の広場に追い込まれて全滅した。その殆どが 9 才から 15 才の少年兵で、さらに小さい子供まで

いたという。この日を記念してパラグアイの子供の日は 8 月 6 日である。持ち出してきた 1636 年のアスンシオン創設以来の公文書も、この時教会と共に灰燼に帰した。戦いは 1870 年 3 月 1 日、セロ・コラーでロペスが戦死してようやく終る。15 才の長男パンチートも母や幼い弟たちを守ろうとして殺された。エリサは 2 人の遺骸を要求し、遺髪を切り取って自らの手でそこに埋葬した。

戦争のあと、国は消滅の危機に陥った。130 万人の人口は 20 万人にまで減り、そのうち男は 1 割で、殆どが老人と子供であったと言われているが、この数字には誇張があるとしても凄まじい人口減少があったことは間違いない。そして多くの国土をブラジル、アルゼンチンに奪われ、100 万ポンドというイギリスからの負債が残った上、多額の賠償金を払うために更なる借金を重ねた。それは後々に至るまで深刻な影響を及ぼした。

エリサは子供たちを連れてヨーロッパに渡るが、この時 50 万ドル相当の宝石、金、現金を持ち出したとされる。一度、財産保全のためにパラグアイに戻ろうとしたことがあった。戦争末期、ロペスは彼女に膨大な土地を与え、恐らく個人としては世界有数の地主であった。しかし彼女がアスンシオンに着くや騒動が起き、15 時間後には追い返された。通説によれば、彼女は 50 才で失意と極貧のうちに病死し共同墓地に埋葬された、とされるが、彼女が住んでいた家はパリの高級住宅街にあり、モンマルトルにある墓も立派だともいう。エリサの子供は 3 人が成人し、パラグアイにソラノ・ロペスの姓を残した。

(いとう・しげこ)